

兵庫県における
女性スポーツの組織化の考察

——兵庫県女子中等学校体育連盟の結成を中心に——

赤 坂 美 月

神戸学院経済学論集

第48巻 第4号 抜刷

平成29年3月発行

兵庫県における 女性スポーツの組織化の考察

——兵庫県女子中等学校体育連盟の結成を中心に——

赤 坂 美 月

1. はじめに

兵庫県において、女子の運動競技はどのように発展してきたのか。これまで、大正8（1919）年の女子のバレーボール大会、大正12（1923）年の女子の陸上競技大会と、新聞社の主催・後援する運動競技大会のはじまりを確認してきた¹⁾²⁾。

そして、これら大会が定着していこうとする中で、大正15（1926）年9月19日の大阪朝日新聞神戸版に、「県下女子体育界」の「統一の機関」である「兵庫県女子中等学校体育連盟」結成への働きかけの記事がみられる。それは「本県女子中等学校 体育連盟を組織」「県婦人連合会の発議で」、「我社神戸通信局の願成る」「明年より実行の議」というものである³⁾。この県婦人連合会の発議とは、同年5月16日に行われた第七回兵庫県連合婦人大会でのことである。この大会は、大正8年に結成された「婦人会関西連合会」と関係する。『兵庫県教育史』には、「昭和二年には県下女子中等学校体育連盟が結成」⁴⁾とされている。

なぜ、兵庫県女子中等学校体育連盟（以下「女子体育連盟」と略）が必要であったのか。なぜ、県婦人連合会は働きかけをしたのか。

女子体育連盟の結成は、女子の運動競技・大会の普及・発展において、女子

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

生徒らをつなぐとともに女子運動競技界の大きな礎になったと考えられる。また、これら背景を確認することは、当時の兵庫県における女子運動競技界の状況を知ることでもある。これがきっかけとなって、各女学校における運動競技の活発化が予想されるが、今日、多くの女性たちが生涯にわたってスポーツに取り組む時代をむかえていることへのつながりを感じる。

そこで、まず、女子体育連盟結成までの女子運動競技大会の状況を整理する。次に、大正15年における女子体育連盟結成への流れ及び女子体育連盟の理念を確認する。そして、女子体育連盟主催の大会実施状況を確認する。あわせて、組織名にある「女子体育」についても検討する。

調査の期間は、兵庫県において女子の運動競技大会（バレーボール）がはじまった大正8年から、女子体育連盟としての大会が実施される昭和2（1927）年までとした。大会名については当日配布されたと思われるプログラムがないため、また氏名などにおいても、新聞では日にちによって記述が違うところもあり出来るだけ確認した日のものとした。なお、引用文の漢字については旧字体を新字体に改めた。

II. 兵庫県女子中等学校体育連盟の結成

1. 女子体育連盟結成までの女子運動競技大会の状況

兵庫県における女子のための運動競技大会であるバレーボール、陸上競技、籃球^{注1)}、軟式庭球の実施状況（年月日、主催・後援、大会回数、場所）について、表1に整理した。あわせて同時期、大会への参加がみられた硬式庭球も取り上げる。

バレーボールの大会は、大正8（1919）年12月6日、大阪毎日新聞社神戸支局主催で、県立神戸高等女学校において実施された女子バレーボール競技大会がはじまりである⁵⁾。そして、大正15（1926）年の第13回大会まで実施されている⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾。

その間、大正12（1923）年4月22日（場所：神戸市立第一高等女学校）、23

表1 兵庫県における女子の運動競技大会（大正8・1919年～大正15・1926年）

年月日		主催・後援	大会	場所
バレーボール				
大正8 (1919)	12.6		第1回大会	県立神戸高等女学校
9 (1920)	6.12		第2回大会	神戸女学院
	11.21		第3回大会	県立姫路高等女学校
10 (1921)	5.29		第4回大会	神戸市立立高等女学校
	11.23		第5回大会	加古郡立高等女学校
11 (1922)	6.17・18		第6回大会	親和高等女学校
	11.18・19		第7回大会	兵庫県明石女子師範学校
12 (1923)	10.28		第9回大会	親和高等女学校
13 (1924)	6.7・8		第10回大会	神戸市立第二高等女学校
	11.23		中止（第11回大会）	県立姫路高等女学校
14 (1925)	6.7		第11回大会	兵庫県明石女子師範学校
15 (1926)	6.6		第12回大会	県立第一神戸高等女学校
	11.21		第13回大会	神戸市立第一高等女学校
陸上競技				
12 (1923)	4.29		第1回大会	神戸高等商業学校
13 (1924)	5.18		第2回大会	神戸高等商業学校
14 (1925)	6.14		第3回大会	神戸高等商業学校
15 (1926)	5.23		第4回大会	神戸高等商業学校
籃球				
14 (1925)	11.8		第1回大会	神戸市立第一高等女学校
15 (1926)	11.21		第2回大会	県立第一神戸高等女学校
軟式庭球				
15 (1926)	6.27		第1回大会	山手庭球倶楽部神戸コート

大阪毎日新聞兵庫県附録（兵庫毎日）、大阪朝日新聞神戸支局 後援；大阪朝日新聞社神戸支局 後援；大阪朝日新聞社神戸通信局

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

日（場所：県立姫路高等女学校）と、大阪体育協会主催、大阪毎日新聞社神戸支局後援で、「極東オリムピック大会出場 女子バレーボール関西選手権大会」が実施されている¹⁷⁾。この年の第8回大会は確認出来なかった。また、大正13（1924）年11月23日実施予定の第11回大会が中止となっている。

陸上競技の大会は、大正12年4月29日、兵庫県女子体育協会主催、大阪朝日新聞社神戸支局後援で、神戸高等商業学校において、第1回兵庫県女子中等学校陸上競技大会が実施されている。そして、大正15年の第4回大会までの実施である¹⁸⁾。

籃球の大会は、大正14（1925）年11月8日、兵庫県女子体育協会主催、大阪朝日新聞社神戸通信局後援で、神戸市立第一高等女学校において、第1回県下女学校籃球大会が実施されている。そして、大正15年の第2回大会までの実施である¹⁹⁾²⁰⁾。

軟式庭球の大会は、大正15年6月27日、兵庫県女子体育協会主催、大阪朝日新聞社神戸支局後援で、神戸山手庭球倶楽部^{註2)}において、第1回県下女学校軟式庭球大会が実施されている²¹⁾。

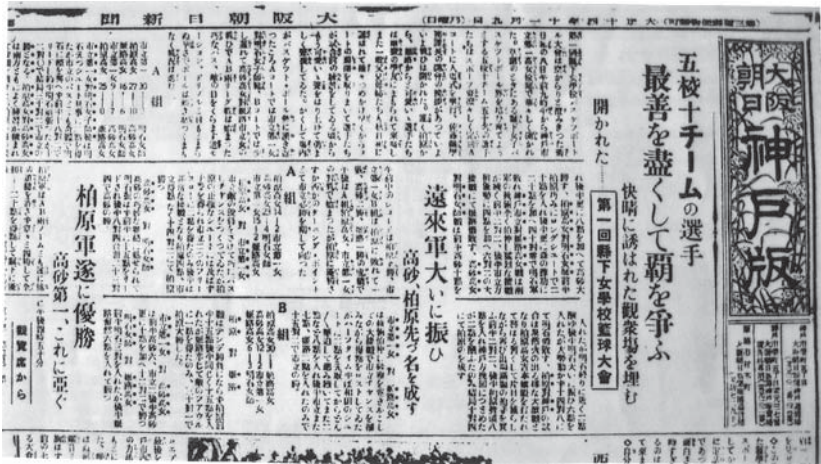
硬式庭球の大会については、県内の大会実施がないように思われるが、兵庫県の生徒が大正期に活躍している。大正13年、全日本選手権の女子が開始されている²²⁾。その大正14年の第2回大会のダブルスにおいて羽山佳江・安宅登美子組が優勝、大正15年のシングルスにおいて羽山が、ダブルスにおいて羽山・安宅組が優勝している²³⁾。

大正12年には第6回極東選手権競技大会、大正13年には日本女子オリンピック大会、明治神宮競技大会がはじまるなど、兵庫県の女子生徒はさまざまな大会に出場し活躍している。

2. 女子体育連盟の結成

1) 全関西婦人連合会について

大正8（1919）年11月24日、「婦人会関西連合会」が結成されている。



第1回籃球の大会 (大正14・1925年)



第1回軟式庭球の大会 (大正15・1926年)

同組織・活動については、石月の『戦間期の女性運動』²⁴⁾、機関誌「婦人」を参考としながら、大阪朝日新聞、同神戸附録(神戸版)にて確認を行った。

「発起人会」は、大阪朝日新聞社において行われている。午前9時過ぎ、振

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

鈴と共に開かれた。「婦人の文化運動に新時代を劃する「歓悦の扉」は眼醒しく開かれた」とされ、婦人は、近畿、山陽、四国、東海、北陸、九州から182名の代表者とある。

兵庫県からは、神戸女学院同窓会（ミス・デフォレスト、黒田治子、渡邊つね子、安田靖子）、桜楓会（志賀基子、三枝澄子）などの参加がみられる。

大阪朝日新聞社の恩田和子^{注3)}による開会の辞、次いで本社編輯局長の高原操の挨拶があり、山岡春（府下泉南郡婦人修養会）が座長に指名されている。山岡座長は「予め配布された今回の婦人会連合大会設立の趣旨書並に申合せに就いて質問討議を計ることを宣した」とされている。

次に、「趣旨」「申合せ」「附記」を取り上げる。

趣旨

意義ある文化運動の一つとして今日茲に婦人会関西連合大会が生れ団体の大きな力を以て欠陥の多い現代の生活の改造に力を蓋し得る機会を得たのは喜ばしいこと、思ひます殊に社会運動発源の地たる関西に於て此の新らしい結合の第一声が揚がった事は深く記念すべきであつて光榮ある此の前途に当り左の條々を申し合はせ健実に会合の目的を貫徹することに努めたいと思ひます

申合せ

- 一 常に進歩せる時代の思潮を汲み見聞を広くし思想の向上を計る
- 一 品性を高め趣味を豊かにし身体を練り社会の一員としての強き信念と活動力を養ふ
- 一 時代に適合せざる陋習を斥け生活改造に力を蓋す
(11月25日の新聞には「現代に適合せざる陋習を斥け生活の改造に力を蓋す」とある)
- 一 会員互に協力し組織的に行動することによつて更に其の効果を大にす

ることに努む

附記

- 一 毎年一回以上大阪に連合大会を開く
- 一 近畿地方にては毎年二回以上他の各地方にては毎年一回以上地方大会を開き連合大会との連絡を計る
- 一 婦人会関西連合大会事務所を大阪朝日新聞社内に置く

以上²⁵⁾²⁶⁾²⁷⁾であるが、申合せに「品性を高め趣味を豊かにし身体を練り社会の一員としての強き信念と活動力を養ふ」とあるように、当初から身体や生活のあり方に着目している。この一文は、婦人会関西連合会の理念の一つであることから、この組織が考える「女子体育」ととらえた。平成23（2011）年に公布された「スポーツ基本法」の条文にある「スポーツは、……国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のもの」²⁸⁾につながるものがある。

大阪朝日新聞社が主催して「婦人会関西連合大会」^{註4)}が中央公会堂において行われている。午後1時10分、見出しに「四千の婦人の美しい波 連合大会始まる」とあり、「恩田司会者開会を宣し」とある²⁹⁾。

婦人会関西連合会は、大正12（1923）年の第5回大会で「全関西婦人連合会」と改称し、大正13（1924）年の第6回大会（11月1・2日）後の12月、機関誌「婦人」（月刊）^{註5)}を発行している³⁰⁾。

石月は、全関西婦人連合会は「女性団体の初集合が試みされた」として、「この第一回大会を機に各地連合婦人大会も開催されるようになり、大正デモクラシーの中で、各地域女性運動の先駆的役割を果たしたと考えられる」としている。

また、全関西婦人連合会の活動について、第1期（大正8・1919年～大正13・1924年）、第2期（大正14・1925年～昭和6・1931年）、第3期（昭和7・1932

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

年～昭和16・1941年)に区分している。第1期は「各地の女性団体の代表者が一堂に会することを主目的とした初期の活動期」, また「初期の議題は, 廃娯, 教育, 物価, 職業, 農村, 育児問題など多岐にわたっていた」としている³¹⁾。

2) 全関西婦人連合大会と兵庫県連合婦人大会

兵庫県連合婦人大会と全関西婦人連合大会の実施状況について, 大正15(1926)年までを確認し, 表2に整理した。

全関西婦人連合大会は, 大正15年の第8回大会まで毎年開催されている。

この間, 大正11(1922)年の第4回大会代表者会において渡邊常³²⁾, 大正13(1924)年の第6回大会代表者会において安田靖子が座長をつとめている³³⁾。

次に, 兵庫県連合婦人大会の実施状況であるが, 大正9(1920)年から大正15年の第7回大会まで毎年実施されている³⁴⁾³⁵⁾³⁶⁾³⁷⁾³⁸⁾³⁹⁾⁴⁰⁾。この大会回数については, 年によって記述が異なっており, 表2には記載しなかった。

先の婦人会関西連合会設立の趣旨, 申合せの「附記」に, 「近畿地方には毎年二回以上其他の各地方には毎年一回以上地方大会を開き連合大会との連絡を計る」とあるが, 石月は「近畿地方婦人連合大会 京都, 神戸」としている⁴¹⁾。

大正9年6月19日の大阪朝日新聞神戸附録には, 「大阪朝日新聞主催近畿連合婦人大会」(6月27日)の告知があるが, 「我兵庫県下にも一の婦人団体を組織して……婦人相寄り相扶け時勢と共に進みたい」とある⁴²⁾。6月25日から近畿婦人連合大会となっている。

6月28日の大阪朝日新聞神戸附録に, 近畿婦人連合大会協議会は, 午前9時より多聞小学校において開催, 「姫路婦人会代表者, 氷上那竹田婦人会等地方からの出席者もあつて」とされ, 総員50名とある。

協議会の議長は「県立女学校塚本ふち」^{註6)}とあるが, 塚本は大正10(1921)年, 大正12(1923)年においても議長とされている⁴³⁾⁴⁴⁾。

大会は午後1時より青年会館で行われている。

表2 兵庫県連合婦人大会と全関西婦人連合大会(大正8・1919年～大正15・1926年)

年	月日	大会	月日	大会
大正8 (1919)			11.24	婦人会関西連合大会 「婦人会関西連合会」
9 (1920)	6.27	近畿婦人連合大会 協議会議長：塚本ふじ (県立神戸高等女学校) 協議会会場：多聞小学校 大会会場：青年会館	10.25	第二回婦人会関西連合大会
10 (1921)	6.5	近畿婦人連合大会 協議会議長：塚本ふじ (記述なし) 協議会会場：中宮小学校 大会会場：県立神戸高等女学校	10.30・31	第三回婦人会関西連合大会
11 (1922)	6.4	近畿連合婦人大会 協議会議長：長谷場もとじ (クリスト教女子青年会) 協議会・大会会場：山手小学校	10.21・22	第四回婦人会関西連合大会
12 (1923)	6.3	近畿連合婦人大会 協議会議長：塚本ふじ (神戸女学院同窓会) 協議会・大会会場：県会議事堂	10.5	第五回全関西婦人連合大会 「全関西婦人連合会」と改称
13 (1924)	6.8	兵庫県連合婦人大会 協議会議長：望月くに (神戸保母会) 協議会・大会会場：県会議事堂	11.1・2	第六回全関西婦人連合大会 12.10 機関誌「婦人」創刊
14 (1925)	6.7	兵庫県連合婦人大会 協議会議長：藤田とき (神戸女学院同窓会) 協議会・大会会場：県立第一神戸高等女学校	10.24	第七回全関西婦人連合大会
15 (1926)	5.16	兵庫県連合婦人大会 代表者協議会議長：上田きよ (神戸消費組合家庭会) 代表者協議会・大会会場：県立第一神戸高等女学校	11.6・7	第八回全関西婦人連合大会

大阪朝日新聞神戸附録 (神戸版), 石月静恵 『戦間期の女性運動』より作成

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

「向上の一路を求めて 来り集る二千の婦人」の見出しとともにその内容が記されているが、「神戸女学院校友渡邊常子女史司会の下に記念すべき此の大会は初められた」とある。また、県立神戸高等女学校の生徒40名が田中銀之助の指揮の下にコーラス「賤の小田巻」を、神戸女学院青野女史による伴奏「凱旋」が行われたことも記されている⁴⁵⁾⁴⁶⁾。

大正13年には、「例年神戸市にて開催された近畿連合婦人大会は今年から兵庫県連合婦人大会と改称」とある⁴⁷⁾。このことは「婦人」創刊号にも「第五回に地方大会を削除」とされている⁴⁸⁾。

大正14（1925）年1月発行の「婦人」によれば、「神戸の婦人団体は現在四十を超えてゐる。其の中三十団体は神戸連合婦人会に加盟して毎年一回春季に兵庫県下各婦人団体と共に兵庫県婦人大会を開催してゐる」とある。また、「兵庫県婦人連合大会は総て関西婦人連合大会の形式に従ひ、協議会では各婦人団体代表者の提出する問題に就て討論し、大会では主として名士の講演を聴くことになつてゐる」とある⁴⁹⁾。

そして、大正15年5月16日、女子体育連盟の結成が議題の一つとなる「第七回兵庫県連合婦人大会」となる。

大会前日の新聞には、「代表者会に参加する婦人団体は全県下を通じて四十一、この代表者百六十余名が一堂に会して婦人問題と、婦人の立場から考察したる社会改良の諸問題とを討論」とされている⁵⁰⁾。

この41団体・人物を確認しようとしたが、名称の省略、日によって記述の違いがみられた。そこで、5月12日に行われた婦人大会打合わせ会の記事に「代表者会の議長は当日選挙により決するもあらかじめその人選をなし当日推薦、その当選を期すること、左の七名をせんこう委員にあげた」とされていることから、これら人物は本大会の主要メンバーと考えた。榑崎たけ子（神戸海友婦人会）、入江千代（神戸基督教女子青年会）、鹿野（第二高女）、上田きよ（神戸消費組合家庭会）、東浦ふみ（神戸女学院同窓会）、渡邊常（神戸女子家庭塾）、望月（神戸保母会）である⁵¹⁾。

3) 機関誌「婦人」と女子体育

兵庫県連合婦人大会における女子体育連盟結成への働きかけの手がかりとするために、大正13（1924）年から大正15（1926）年までの機関誌「婦人」の中から、主な女子体育（趣味を豊かにし身体を練り）に関するものを表3に取り上げた。

大正13年は、第一巻第一号のみの発行であることから、それまでの組織・活動の内容に加え、第6回大会についてまとめたものとなっている。この大会の議題について石月は、「教育、体育、育児、農村振興、婦人と職業、娼妓、禁酒問題と非常に幅広く」²⁾としている。

この「体育」については表3にあるように、11月1日の代表者会における「女子の体育」に関する提案である。一つ目は徳島県連合婦人会からの「学校卒業後に於ける女子体育の振興」についてであるが、その理由として、学校に於ては体育を重要視しているが、卒業後は「境遇と趣味とが一変を来し殆んど体育を度外視するの感があります非常事変は勿論平常に於ても女子の体育の必要な時代」となってきたことから、「持久的計画を以て女子体力の増進」につとめる必要があると信じるというものである。

二つ目は神戸連合婦人会からの「家庭婦人の体育を奨励すること」である。具体的には「小学校卒業したる婦人が一定の時刻に附近の女学校又は学校のグラウンドを使用し得るやう管理者に注意を促すこと」とされている。「右二案を一括して上程」とある。

2日の大会では、「代表者の代表演説に移つたが、朱唇より迸るところ農村振興を説き、……体育奨励を高唱する等舌端火を吐くの概があつた」とされている。

大阪の山本秀が「体育と服装」として、「巴里で開かれました万国オリンピック大会……私共の期待した成績は挙げられず、……先決問題としては女子の体育改造であります、将来の第二国民を産むべき母体の改造であります」とし、「運動奨励の必要を痛感」し、そのためには「服装の改良」が必要であること

表3 機関誌「婦人」にみる女子体育

発行	内容
第一巻第一号 大正13 (1924) 12.10	第六回全関西西婦人連合会代表者会；議案に「女子の体育」 一、学校卒業後に於ける女子体育の振興は刻下の急務と考へますが婦人会として如何なる指導方法を採るべきか（姫島県連合婦人会） 二、家庭婦人の体育を奨励すること（神戸連合婦人会） 第六回全関西西婦人連合会；代表者の代表演説「体育と服装」山本秀（大阪）
第二巻第一号 大正14 (1925) 1.10	女子体育の協議 東京と奈良とで（前年11月、文部省での所轄学校体育協議会に出席した奈良女子高等師範学校雑質体育教官の談） 女子体育講習会（奈良）、女教員体育協議（京都）、柔道乗馬を勧む（福岡の新進婦人）、日本婦人アムカガ会（兵庫）
第二巻第二号	婦人会消息；神戸連合婦人新年会（…「神戸裏山登攀実況」〔六甲スキー実況〕…平村映画部の好意で映写…）、女学生のスキー（彦根高等女学校）
第二巻第三号	教育界；スキーダンス（富山女子師範学校では冬期に於ける女子体育向上のためスキーを利用した体操の新工夫…）、あつまり；日本婦人アムカガ会
第二巻第四号	女子運動競技の発達 奈良女子師範学校 浦野教諭談 欧米女学生のダンス 広島師範教授 杉浦氏談（写真；スクール・ダンス講習 大阪女子体育研究会で最近開催）
第二巻第五号	第一線に立つ婦人 = 女子運動競技家として = 安宅、羽山両嬢（写真あり）
第二巻第六号	第一線に立つ婦人 = 女子運動競技家として = 山下花子嬢（写真あり） 女流選手最初の外征 極東大会に参加した 戸田藤木の二嬢（写真あり）
第二巻第七号	写真文（闊々しい選手入場式、将米日本の象徴 大阪朝日新聞社神戸支局主筆の兵庫県下女子中等学校陸上競技大会…）、全関西西婦人連合会主催第八回文化講座 写真（兵庫県下女子中等学校陸上競技大会において三度び優勝旗を獲得した神戸市立第二高等女学校）
第二巻第八号	科学の眼に映ずる女性の諸特徴 医学博士 徳明英（…兵庫県連合婦人大会の席上で行はれた…特別講演…）
第二巻第九号	東京だよ！ 東京朝日 竹中繁子（…米国体育大学女学生の西班牙舞踏…組着に帯在中…東京女子音楽体操学校のA氏とお馴染に…）写真あり
第二巻第十号	第七回全関西西婦人連合会代表者会；懇談会にて「体育」 一、漸次旺盛になる青年女子の運動競技に対して考ふべき点なきか（金沢婦人会） 二、国立の国民体育研究所を速に設立せられん事を我全関西西婦人連合会大会よりその筋に建議すること（鳥取県連合婦人会） 三、女子体育に関する諸語を研究して之を一般に示さる、やう文部省に建議すること（高知県浜田婦人会） 代表者の感想 印象の概略を研究して之を一般に示さる、やう文部省に建議すること（高知県浜田婦人会） 日本及び世界；日本 明治神宮競技「青年日本」の象徴
第二巻第十二号	弱い子供と強い子供 大阪医科大学小児科長 医学博士 尾岡栄（全関西西婦人連合会主催の「母の愛の講演会」における尾岡博士の講演演の大意…） 体育ダンスに就て 大阪女子体育研究会 山本ひで（写真 体育ダンス）

発行	内容
第三巻第一号 大正15 (1926).1.10	母性愛といふこと 京都帝国大学教授 野上俊夫 (写真 足並みそまろへへ 英国少女の冬の運動)、俳句講座 (写真 奈良街道を行く 大阪女子師範のウオーキング・レース) 生活を楽しむ 大阪朝日 恩田和子 (公園が郊外に出て…あの朗かな生き生きした、夢中になつてその楽しい時を享樂してゐる…光景や生活が日本にも…) 弱い子供と強い子供 (一) 大阪医大小児科長 医学博士 尾関栄
第三巻第二号	母性愛といふこと (2) 京大教授 文学博士 野上俊夫、弱い子供と強い子供 (2) 大阪医大小児科長 医学博士 尾関栄
第三巻第三号	南伊太利の旅路 大阪朝日 恩田和子 (写真 ランラン娘勝つて去る二月…カンヌで開かれた世界庭球選手権の争奪戦で、米国のヘレン・ウィルズ嬢と…) 唯の旅 聖の旅 (写真 屋上でやる米国職業婦人の体育運動…)
第三巻第六号	婦人界消息：第七回兵庫県連合婦人大会 第三 神戸市内の各大学校連盟体育指導機關をつくるやう各女学校長に勧告すること 午前は協議会 第四 家庭婦人は体育スポーツ等に対する興味を涵養しかつとめて実行するやう努めること (若葉倶楽部)
第三巻第七号	山 山越礼讚 長谷川零餘子 (写真 理想的な婦人の登山姿)、婦人登山家の日記から 黒田初子 (写真あり) 登山の用意 神戸徒歩会会長 塚本永焼、山を恋ふ 大阪朝日 恩田和子、編輯者の机：山行・心 大阪朝日 比佐友香
第三巻第八号	海 海の伝説 藤澤衛彦、海人夜話 米蓮太刀雄、夏の崎波 田中宇一郎、白浜のキャンピング生活 全関西連合主催一 ドーナバーを頼断の人魚エターナル嬢 婦人水泳の話 大阪朝日 渡辺文吉 (写真 河童の女先生-女生徒に水泳を教へるとかく 弊害が生じ易いといふので女教員に水泳を教へ河童の女先生にすることになり、大阪市教育会では市岡高女のプールで講習会を開いた)
第三巻第九号 (白浜婦人キャンピング)	浜ゆふ面映ゆる 紀南白良浜の 婦人天幕生活通信 思ひ出の白良浜！ 原始的な篝火の束ひ！ 名人新五郎の魚突き！ 大阪朝日 比佐友香 「祝南の日」のために 富田碎花、天幕生活後記 漂泊的生活と集団的生活 大阪朝日 恩田和子 婦人キャンピングについて お世話になつた方々 大阪朝日新聞社内 全関西婦人連合会 家庭教育と高原の天幕生活 愛する子女を自然に放て！ 大阪朝日 村上鏡夫、写真 (キャンピング関係30枚) 独力十五点を獲て 名誉賞を受けた 人見稲枝嬢の活躍 たかまる生 思ひ出のキャンピング・ライフ 久遠の浜辺 (キャンピング生活の思ひ出 石川楨子他)
第三巻第十号	頬紅と口紅 バチエラ・オヴ・サイエンス 池部秀人 (写真 ゴルフ場へ)、思ひ出の白良浜 キヤムペンギン感想 (神徳と感謝と自由 TU子他) 第八回全関西婦人連合大会 第二日：音楽と舞踊 石井漢 石井小浪 (文と写真 石井漢氏等の舞踊詩「美しき昔きダニエヌーブの流れ」)
第三巻第十一号	代表者の感想 (写真 神宮鏡技の女子リレー)
第三巻第十二号	懐かしい白良浜 婦人キャンピングの 思ひ出の会 (文と写真) 女性とウインター スポーツ たかまる生 (文と写真 仲よく遊びませう！ 見るからに愉快さうではありませぬか！。雪まみれになつて…) 新聞記者の悩み 東京朝日 秋山安三郎 (写真 氷上に踊る 駭氷に魅了された雪雪に憧れた スイスを訪れた アメリカのガール・スケーターです) スクラップアップから 十一月中の婦人界 関東方面：寺尾文子嬢の新記録 寺尾文子嬢は、神宮鏡技百メートル準決勝に十二秒七と云ふ世界的記録を作りしました。金沢医大の岸学士は嬢等姉妹の指紋及び血液を研究し既に世界的的確証を得て、近く金沢医学会に発表するさうです。本社からは世界記録記念章を贈りました。 本社の別：…ウインター・スポーツの季節が来ました。雪雪に覆はれた山の斜面が、スキー・ウーマンを守つてゐます。五十四頁の挿面の写真に見るやうに、二人のアメリカのガール・スケーターが、雪と氷に憧れてスイスの国まで滑りに行きました。踊り上るやうな壮快な話ではありませんか。

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

から「単にお子達ばかりでなく一大英断をもつて日本人に向くやうな、またお体に似合ふやうな洋服を常用せられ、在来の服装は綺麗にお捨て下さることを国家のため、子孫のために望んで已みません」と述べている⁵³⁾。

大正14(1925)年について、1月は、文部省での体育協議会に出席した雑賀の話として、女子体育について「競技運動は如何に取扱ふべきか」に対し、「運動種目の考査、年齢と体格の調査、指導者の選択、服装の設備等を考慮しこれを具体化し女子体育の発達を期する事になつた」とある。また、各地での「体育」の活動が報告されている⁵⁴⁾。

2・3月は、各地でのスキー情報が報告されている。2月の「婦人会消息」に神戸連合婦人新年会とあり、登山やスキーの映写会の実施が記されている⁵⁵⁾⁵⁶⁾。

4月から8月までは、「運動競技」に関するものが多く目に留まる。その中にさまざまな分野で活躍する「第一線に立つ婦人」を紹介したものがある。5月には「=女子運動競技家として=安宅、羽山両嬢」とあり、先の「硬式庭球」のところで取り上げた二人である。

その内容は「この二人のダブルに強いのは、全くダブル試合の根本をなすチーム・ワークが、十分にとれてゐるからです。然もそのチーム・ワークのとれてゐると云ふのも、畢竟は二人の仲のよい友情が齎したものです。……安宅さんは、……足も速いし、眼も炯々、殊にそのネット・プレーに、十分の自信がつき、羽山さんは……、球に対する判断が頗る正確で足も安宅さん同様非常に速いし、そのグラウンド・ストロークは、一寸他の選手の追従出来ない程巧い」といったことである⁵⁷⁾。

6月は、同様に陸上競技の山下花子が紹介され、「女流選手最初の外征」として、第7回極東選手権競技大会(マニラ)に参加した硬式庭球の戸田定代、藤本八重子が取り上げられている⁵⁸⁾。

7月は、兵庫県下女子中等学校陸上競技大会が取り上げられている⁵⁹⁾。

8月は、兵庫県連合婦人大会における、産婦人科医徳岡英による特別講演

「新しき女性の生命創造」を「科学の眼に映ずる女性の諸特徴」に改めたとするものである⁶⁰。

11月は、第7回大会の内容がみられる。

代表者会での討議が活発化し時間切れとなったことから、懇親会の形式の下に引き続き討議を行ったということで、表3にある「体育」に関する議論が少し記されている。第一は、金沢婦人会の藤岡歌代が「漸次旺盛になる青年女子の運動競技に対して考ふべき点なきか」についての説明に対して、山本秀子（大阪）が「提案者に敬意を表したい。現在の女子体育は余りに男子中心の競技熱に浮されてゐるのではないかと思ふ。科学的に研究する必要がある」と論じたとされている。

第二は、鳥取県連合婦人会の田寺とし子が「国立の国民体育研究所を速に設立せられん事を我全関西婦人連合会大会よりその筋に建議すること」について、「文部省でも研究しているゐるやうだが、文部省と独立した研究機関をつくりたい」と説明したが、少数で否決とある。第三は、鳥根県浜田婦人会からの「女子体育に関する諸件を研究して之を一般に示さるゝやう文部省に建議すること」に対して、林千代子（呉）が「二箇年前に、この意味の注意がありました。ゆゑに今更研究するまでもあるまい」という意見によって提案（三）は撤回とあるが、当時の女子体育に関する議論の様子が伝わってくる⁶¹。

この年は「体育」、「運動競技」という言葉がよくみられる。写真の効果も大きく、時に外国事情も取り入れ、毎月何らかの情報が女性たちに伝えられていたという印象を受ける。

大正15年についても、女子体育に関する情報が多いように思われる。しかし、「体育」という言葉は少ない。

1月には、「生活を楽しむ」として、恩田和子が自ら見聞きしたヨーロッパと日本における生活のあり方を比較したものがある⁶²。

2月は、「母性愛といふこと（2）」がある。前年12月1日、全関西婦人連合会主催「母の愛の講演会」において、野上俊夫教授が講演した速記とある。そ

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

の中に「間違つてゐる女女スポーツの方針」として記された部分がある。それは、日本ではこのごろ婦人の運動が盛んであり、「第一に男のすることを、婦人がやつても婦人が劣るものでないことを示すもの」であり大変いいことであるとしながらも、「アメリカの女の運動の選手には非常に難産が多い」といったことを例にあげ、それは「女の運動の仕方」が悪かったとしている。「心ある人々の主張では女の運動は男と全く違つたものでなければならぬ。女は早く走る必要はない。それよりも女に一番大切な生殖に関する器官を保護する、身体の内臓を保護することが本当の体育」であり、女といふことを忘れて運動一遍に走ることはよく考えていただきたいといったことである⁶³⁾。

6月は、第七回兵庫県連合婦人大会の掲載がある。これは後に取り上げる。

7月は山特集、8月には全関西婦人連合会が主催するキャンプのことなど海の特集があり、9月は「白浜婦人キャンプ号」とされている⁶⁴⁾⁶⁵⁾⁶⁶⁾。

この年は、山、海、キャンプ、スケート、スキーといった野外活動に関する記事が多い。また、陸上競技の人見絹枝や寺尾文子といった選手のみならず、テニスのセザンヌ・ランランとヘレン・ウイルスの試合結果などの情報も伝えられている。子どもから大人までの視点がある。

これら確認を通して、東京・大阪朝日新聞社の記者が女子体育に関する記事を記していることについて、「婦人」の編集や全関西婦人連合会の活動において、女子体育に理解を示すというよりも積極的に推進しているように伝わってくる。この機関誌の読者がどのくらいいたのか。女子体育に関する情報を愉快地に楽しんだり、刺激を受け関心・理解を深めた女性たちがどのくらい実践にたげたのか気にかかるところである。

なお、昭和2（1927）年は、女子体育に関する内容が非常に少なくなっており、見出しにみられない月も多かった。

4) 兵庫県連合婦人大会と女子体育連盟

(1) 女子体育連盟結成までの流れ（大正15・1926年）

大正15年における女子体育連盟結成までの流れを確認した。

5月3日の大阪朝日新聞神戸版には、県会議事堂にて行われた「第七回兵庫県連合婦人大会」（5月16日）の第二回準備協議会について、「婦人は運動に関する趣味を養ふこと」とする大きな見出しとともに内容が記されている。

議題は8項目あり、その中に「神戸市内の各女学校連合体育（スポーツ）指導機関をつくるやう各女学校長に勧告すること」、「家庭婦人は体育、スポーツ等に対する趣味を涵養しかつ、つとめて実行するやうつとめること（若葉倶楽部）」の二つがみられる⁶⁷⁾。

そして、5月17日の同神戸版には、大会について、「因襲から脱離して現代婦人への自覚へ熱烈な討議で一貫した」として、その様子が記されている⁶⁸⁾。この大会については、同年の「婦人」（6月10日発行）の「婦人界消息」にもみられる⁶⁹⁾。

代表者協議会は、午前9時半から県立第一神戸高等女学校講堂にて開催され、170名が出席とある。大阪朝日新聞社記者北村兼子が開会を宣し、「議長に消費組合上田きよ氏副議長に女子青年会入江女史を満場一致で推し」とあり、協議会議題討議に移るとされている。

議題は10項目となっており、「第二 消費組合の内容を女子の中等学校において教へるやう勧めること」（可決）、第三に女子体育連盟に関すること、と女学校に関して二つある。そして、第四に婦人の体育・スポーツに関することがみられる。これら内容は次のとおりである。

第三 神戸市内の各女学校連盟体育指導機関をつくるやう各女学校長に勧告すること。男子中等学校に運動連盟なる指導機関があるのにまだ女子中等学校には何等統一的指導機関がなく、女子運動の普及し旺盛になつた今日一日も早く設置する必要があるとの本社員の説明あり体育指導については勝敗を主とせざること、生理的方面に注意することを特に希望して勧告することに可決

第四 家庭婦人は体育スポーツ等に対する趣味を涵養しかつつとめて実行するやう努めること（若葉倶楽部）提案者の出席なく保留してこれを後にゆづり

午後の大会も同校で行われ、「藤田とき（神戸女学院同窓会；筆者注）女史の開会の辞、君が代合唱について消費組合家庭会上田きよ子女史から午前中の協議会決議条項の詳細なる報告があつた」とされている。その他神戸市立第一高等女学校生徒百余名の大合唱「湖上の月」、県立第一神戸高等女学校生徒野上菊のピアノ独弾、松蔭高等女学校生徒の合唱、神戸女学院生徒李のピアノ獨弾なども行われている。会場も女学校であり、兵庫県連合婦人大会と各女学校とのかかわりがみられる。

8月2日の神戸又新日報には、「市内女学校の運動連盟 体育奨励の根本義から各学校の意見一致す」と「運動連盟」としての記事が次のようにみられる⁷⁰。

神戸市内の公私立女学校では運動の方針もまちまちで、「甲の学校が奨励してゐる事も乙の学校は之を避けるといふやうな事」も多々あった。

しかし、現状のままで押し通しては何処までもチグハグに終わることから、せめて庭球だけ連盟をつくって同一歩調にと県立第一神戸高等女学校が発起となり、「過日市立第一、市立第二、親和女学校、松蔭、日本精華、山手等の運動担当教師を同校講堂に招致」し、テニス連盟に関する相談会を開いたところ、「単にテニスに止まらずバレー、バスケット、陸上競技等すべてを包含する一大運動連盟をつくるの希望が大多数を占めた」ことから、「一躍市内女学校の運動連盟をつくる運動と変り県女高宮教諭^{註7)}外二名を起草委員に推して散会するに至つた」。「来月十三日委員の提案を中心に総会を開く筈で総会に依つて可決した暁は各校共其連盟規約に基いて進み運動界の一大革新を来すであらう」とされている。この後の同新聞に関連記事を見つけることは出来なかった。

そして、9月19日の大阪朝日新聞神戸版の「本県女子中等学校 体育連盟を

組織 県婦人連合会の発議で 我社神戸通信局の願成る 明年より実行の議」となる。

その詳細は、大正12（1923）年に、大阪朝日新聞社神戸通信局の提唱のもとに兵庫県女子中等学校陸上競技大会を開催して以来、「県下女子体育界は非常な勢ひで発達し始め近年の活躍は実に目ざましいものである」が、「まだ過渡期にある県下女子体育界にはこれが統一の機関がなく各々まちまちの状態」であった。

これを遺憾として5月に開催された兵庫県連合婦人会では、「女子体育の向上、発展を計るため女子体育連盟を組織するやう女学校長に建議すること」の決議をなし、「直に連合婦人会では各女学校長に決議案を送つて各種 運動の統一 機関設置を希望したがこれが動機となつて県下女学校長間では男子中等学校運動連盟に対する女子中等学校運動連盟を組織しやうとの議かよりより話題に上つてゐたが去る十六日県立第一高女にて開かれた県下女子中等学校長会議にてこれが議案に上り満場一致で連盟組織を見ることゝなつた」というものである。

そして、「主なる骨子」として「連盟規約」が掲載され、具体案については10月15日、神戸三中において開催される全県下中等学校体操教員の講習会席上で協議し、11月16日の「女学校長会議で最後の決定を見るはずになってゐる」、そして「兵庫県女子中等学校体育連盟は大正十六年度より成立さるゝことになつてゐる」とある⁷¹⁾。この校長会議に関することはみつけることが出来なかった。

8月記事の神戸市内の「運動連盟」と、兵庫県内の「体育連盟」との関連は確認出来なかった。しかし、5月の兵庫県連合婦人大大会が県立第一神戸高等女学校で行われていること、神戸市内の運動連盟組織化に関する起草委員が同校の教師であること、『兵庫県教育史』に「昭和二年には県下女子中等学校体育連盟が結成」のみの記載であることから、同一組織と判断した。

女子体育連盟の組織化は、すでに「男子中等学校運動連盟」があることから、

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

女子の「各種 運動の統一 機関」である「女子中等学校運動連盟」の設置を希望するという働きかけであり、検討される中で、神戸市内からさらに兵庫県内まで拡大し体育連盟として結成するに至ったと考えられる。

(2) 女子体育連盟について

『兵庫県教育史』には、「兵庫県下中等学校運動競技連盟」が大正13（1924）年1月1日発足とある⁷²⁾。

大正12（1923）年6月23日の大阪朝日新聞神戸附録には、「邪道から救ひ出して 真の運動精神を發揮さす 県下中等校運動競技連盟 気持のよい応援規定を作る」という見出しの記事がみられる。

文中には「右の連盟は近来頼みにあがつて来た運動熱と共に運動そのものの本質がやゝともすると失はれ勝ちで真の運動の發達を阻害……この邪道から運動を救ひ出し真の運動精神を發揮せしめやうとするものである」とあり、「右の主旨に立つた同連盟は學術操行共に優良なるものを選手に選び運動競技がやゝともすると選手の独占となるのを防ぎ一般生徒に普遍するやう努め……」とされている。そして、特に主旨を徹底するために「厳しい応援規定」が設けられてある、として掲載されている⁷³⁾。

次は『兵庫県教育史』に取り上げられている連盟規約である。

兵庫県下中等学校運動競技連盟規約

- 一 本会ハ兵庫県下中等学校運動競技連盟ト称ス。
- 二 本会ハ運動精神ヲ發揮スルヲ以テ目的トス。
- 三 本会ハ県下男子中等学校ヲ以テ組織ス。
- 四 本連盟ニ関スル一切ノ事項ハ県下中等学校長会議ノ方針ニ準拠スルモノトス。
- 五 本連盟ノ主旨ニ適ハザル大会ニハ参加セズ。
- 六 各競技竝ニ応援ニ関スル規定ハ別ニ之ヲ定ム。

付則：本連盟ノ運動種目ハ当分ノ間、野球、庭球、蹴球、角力競技トス。

各運動連盟ハ毎年一回若クハ二回大会ヲ開ク。

練習ノタメ選手ノ合宿ヲ禁ズ。

応援に関する規定：応援団ハ制服制帽ノ在校生ヲ以テ組織

応援団長ハ組長又ハ副組長ヲシテ之ニ当ラシム。

応援ハ応援歌及拍手ヲ以テ之ヲ行ヒ、鳴物一切メガホン旗等ノ器具ヲ用フベカラズ。

一方の女子体育連盟であるが、結成の日には確認出来なかったが、大阪朝日新聞神戸版（9月19日）にある「連盟規約」は次のとおりである⁷⁴⁾。

- 一、連盟は兵庫県女子中等学校体育連盟と称し県下高等女学校、女子師範、女子商業をもつて組織する
- 二、県下女子中等学校の体育の統一、向上発展を計るを目的とする
- 三、各種運動の大会は一種目一年一回とし小会（練習会）は時々開催する
- 四、連盟主催以外の大会には出場せず
- 五、女子体育の調査研究機関を設置する

男子と女子の連盟の名称と目的について、男子中等学校は「運動競技連盟」とされ「運動精神發揮スルヲ以テ目的」とするのであり、女子は「体育連盟」とされ「県下女子中等学校の体育の統一、向上発展を計る」とされている。当時の女学校では、女子体育としての運動のあり方を模索する状況にあったからと考えられる。

以上であるが、棚田は神戸新聞社がスポーツ行事の主催をはじめた大正初期に前後して神戸又新日報が主催をはじめたことについて、「この両新聞社によるスポーツ行事の主催が動機となり、県下のスポーツは校内の活動から外へ飛び出し県下に羽ばたき、県下大会が開催された」とし、「これによって多くのスポーツ団体を生み、中等学校体育連盟や女子体育連盟などの組織が確立され

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

ていった」としている。

また、「学徒の競技団体が、……県体育協会（昭和5・1930年；筆者注）が創立される前に組織を確立」しているとして、「兵庫県のスポーツ組織は、まず学校教育の関係者からはじまっていることが理解されよう」としている⁷⁵⁾。

3. 女子体育連盟と運動競技大会

昭和2（1927）年5月28日の大阪朝日新聞神戸版には、「体育連盟組織と女子陸上競技大会 本年も引つゞき開催 本社神戸通信局後援」の見出しで、「兵庫県女子中等学校では今回体育連盟を組織し女子運動競技界の統一と円満なる発達を計ることゝなつた」と、「女子運動競技界」とある。

また、「同連盟の規約によると運動種目は庭球、排球、卓球、陸上競技、その他女子体育に必要な運動」であり、「大会は各種目につき毎年一回、小会は随時これを開くことになつた」として陸上競技大会を告知している⁷⁶⁾。

そこで、昭和2年におけるこれら大会の実施状況を表4に整理した。前年までの各新聞は、自社主催・後援の大会を中心に大きく記事にしているように思われることから、各新聞社が女子体育連盟主催の大会をどのように扱っているかを注視しながら確認した。大会名称について日にちにより違いがみられた。

表4 兵庫県女子中等学校体育連盟主催の大会

昭和2（1927）年6月5日 第一回県下女子バレーボール大会 主催：県女子中等学校運動連盟 後援：大阪毎日新聞社神戸支局 場所：県立第一神戸高等女学校	昭和2（1927）年6月19日 第一回兵庫県女子中等学校陸上競技大会 主催：兵庫県女子中等学校体育連盟 後援：大阪朝日新聞社神戸通信局 場所：神戸高等工業学校
昭和2（1927）年9月24・25日 第一回県下女子中等学校庭球大会 主催：兵庫県女子中等学校体育連盟 後援：大阪朝日新聞社神戸通信局 場所：県立第一神戸高等女学校	昭和2（1927）年10月2日 第一回県下女子中等学校籃球大会 主催：兵庫県女子中等学校体育連盟 後援：大阪朝日新聞社神戸通信局 場所：県立第一神戸高等女学校

大阪毎日新聞兵庫毎日、大阪朝日新聞神戸版より作成

確認出来たのはバレーボール、陸上競技、庭球（軟式庭球）、籃球であり、「卓球」については、著書などに若干の記録がみられたが、新聞にて確認することが出来なかった。

バレーボールの大会は、6月5日、県立第一神戸高等女学校において実施されている。大阪毎日新聞兵庫毎日には「女子中等学校運動連盟生れて最初の競技会」と「運動連盟」としている⁷⁷⁾。

陸上競技の大会については、大阪朝日新聞神戸版（5月28日）に「大正十二年以来第四回まで引続き挙行して来た女子陸上競技大会も体育連盟主催と同じく本社神戸通信局後援によつて従来通り春季に開催」としている。

また、「参加校は左の規定によつて六月十二日までに兵庫県立第一神戸高等女学校内連盟事務所宛申込みたい」と女子体育連盟が県立第一神戸高等女学校に置かれていたようである。そして6月19日、神戸高等工業学校において実施されている。6月20日の同新聞にはその詳細がみられるが、「かくて連盟理事県立第一高女篠原校長の一場の訓示の後、いよいよ開始される」と記されている⁷⁸⁾。

同日の神戸又新日報にも「県下女子中等校 陸上競技 市立第一高女優勝」という見出しで取り上げられている⁷⁹⁾。「兵庫県女子中等学校体育連盟主催大朝神戸支局主催第一回陸上競技大会」とされている。

庭球の大会は、9月24・25日、県立第一神戸高等女学校において実施されている。大会の様子については、大阪朝日新聞神戸版に「予想以上の成功を収め女学校庭球大会終る 二日間に互る快技接戦の後 県立第一高女校優勝す」との見出しであるが、「理事校である神戸市立第一高女、井上校長から一場の訓示があり」と記されている。審判は「山手倶楽部」とある⁸⁰⁾。

本大会は、神戸又新日報にも「県立第一優勝 県下女子庭球大会」という見出しとともに取り上げられている。小さな記事であるが「兵庫県女子中等学校運動連盟主催の県下女子庭球大会」とされている⁸¹⁾。

藍球の大会は、10月2日、県立神戸第一高等女学校において実施されている。

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

大阪朝日新聞神戸版には「親和高女優勝す 県立姫路高女の善戦」という見出しである。この日のみ文中に「第一回県下女子バスケットボール大会」とされている⁸²⁾。

以上であるが、主催する女子体育連盟の組織名称について、的確に把握されていないという印象である。

III. まとめ

大正15（1926）年5月、第七回兵庫県連合婦人大会協議会において、「神戸市内の各女学校連盟体育指導機関をつくるやう各女学校長に勧告すること」が可決されている。それは「男子中等学校に運動連盟なる指導機関があるのにまだ女子中等学校には何等統一的指導機関がなく」というものであった。

議題となる背景の一つに、大正8（1919）年以降における女子生徒の運動競技大会参加の活発さがある。具体的には、バレーボール、陸上競技、籃球、軟式庭球の県内の大会が実施され、大正12（1923）年の第6回極東選手権大会オープン競技女子排球での優勝、大正13（1924）年にはじまった明治神宮競技大会など全国規模の大会に出場する女学校もあった。

もう一つは、大正8年に結成された全関西婦人連合会・大会の存在である。設立の「申合せ」に「品性を高め趣味を豊かにし身体を練り社会の一員としての強き信念と活動力を養ふ」を定め、女性の身体や生活のあり方に当初から着目していた。そしてこれを「女子体育」と理解していたと考えられる。これらは機関誌「婦人」からも読み取ることが出来る。翌大正9（1920）年から兵庫県での大会（神戸）が開催され精力的に活動されている。

そしてこれらにかかわった大阪朝日新聞社員の存在も見逃せない。全関西婦人連合会・大会の牽引もそうであるが、機関誌「婦人」への投稿など、女子体育を自身の問題としても捉え、外国事情も取り入れながら積極的に情報提供していたのではないだろうか。

こうした全関西婦人連合会代表者会や大会においてさまざまな情報・意見交

換をし、知識を得た兵庫県の女性たちは、地元を目をむけ、女学校にかかわる問題として女子体育連盟の組織化を取り上げたと思われる。

兵庫県連合婦人大会に当初から女学校同窓生らがかかわっていたこと、女学校生徒が合唱などで参加していることから、各女学校の運動競技にかかわる教師だけでなく、さまざまな人々の大きなつながりを感じる。

兵庫県の女子体育連盟と拡大し結成されているが、具体的内容は、男子の「運動競技連盟」として「運動精神ヲ發揮スル」に対し、女子は「体育連盟」として「県下女子中等学校の体育の統一、向上発展を計る」ことを目的とされた。「体育指導については勝敗を主とせざること、生理的方面に注意することを特に希望して勧告することに可決」とあるように、当時、女子の運動競技を称賛・奨励しながらもそのあり方を模索する状況にあったことから、「体育」として意味をもたせたと考えられる。

昭和2（1927）年、女子体育連盟として各種運動競技の大会が実施されている。新聞紙上からであるが、大会名称などにおいてその統一がなされていないようであった。しかし、女子生徒の運動競技にかかわる基盤が出来たことは間違いない。

おわりに、女子体育連盟は女子の運動競技に直接かかわらない人々の働きかけによって組織されたところに意義があると考ええる。女子体育の問題は、その分野のみならず、すべての女性たちの問題ととらえることが出来るからである。これら女子生徒の活動に刺激を受けた社会人女性たちの運動競技への取り組みは今後の課題としたい。

注記

- 1) 「京都バスケットボール協会の歴史」によれば、大正14（1925）年、「京都籃球（ランキュウ）連盟」創設とあり、当時バスケットボールのことを関西では「籃球」、関東では「籠球（ロウキュウ）」と呼んでいたが、昭和6（1931）年、籠球と統一されたということである⁸³⁾。
- 2) 大阪朝日新聞神戸版（6月28日）には、「感謝」として「第一回女子庭球大会に対

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

して多大の御尽力を願ひました山手庭球倶楽部」とある。棚田によれば、軟式庭球をする師範学校卒の小学校教員の有志が、山手小学校の杉野精造校長の計らいで同校の校庭の東側にあるテニスコートでプレーを続けた。……会の名称を“山手クラブ”と改名した、ということであるが、具体的な年は記されていない⁸⁴⁾。同一クラブと思われるが現在も活動している「神戸山手クラブ」のホームページには、大正7（1918）年発足とされている⁸⁵⁾。

- 3) 石月によれば、大正6（1917）年10月、大阪朝日新聞社の社会部長であった長谷川如是閑は、東京の読売新聞婦人欄の担当記者恩田和子を大阪朝日新聞社に入社させた。昭和23（1948）年に退社するまで、社会部、計画部で活躍し、大阪朝日新聞の紙面や事業などを通じて、関西の女性たちに大きな影響を与えた。また、大阪朝日では社会部を中心に、大正8（1919）年の秋、女性団体の結集の斡旋に乗り出した。主としてその衛に当たったのは、恩田と東京朝日の女性記者竹中繁子とされている⁸⁶⁾。
- 4) 石月によれば、大会は昭和3（1928）年の大会が「御大典事業」のために中止となったが、大正8（1919）年の第1回大会から昭和16（1941）年の第22回大会まで開催されている⁸⁷⁾。
- 5) 石月によれば、「婦人」は昭和12（1937）年1月まで発行されている⁸⁸⁾。
- 6) 「婦人」（昭和2年1月10日発行）に「塚本ふじ子女史」として、全関西婦人連合会には毎年兵庫県代表の一人として出席し、かつては議長、副議長なども勤めて異彩を放った兵庫県立神戸高等女学校教諭塚本ふじ子女史は、1月4日……永眠した。享年五十八。女史はいまだ吾が婦人界の振はざる明治三十年ごろ早くもアメリカのペンシルヴァニア州ウイリソン大学に五ヶ年留学し、帰朝後は二年ばかり母校神戸女学院の教師を勤め、その後二十数年間神戸高女の英語の教鞭をとり、玉のごとき資性は生徒から慈母のやうに慕はれてゐた。女史はその半面神戸における婦人運動の先駆者で、現に第一線に立ち、目下婦人同情会、神戸婦人会、神戸ウーマンズ倶楽部の幹事、神戸女学院同窓会長などをつとめてゐる。夫君永堯氏は住友銀行につとめてゐるが、登山家として知られ、その間に一男三女があり、一家は日常英語を以て会話し神戸における最も新らしき家庭としてうたはれてゐたとされている⁸⁹⁾。
- 7) 県立第一神戸高等女学校の体操教師である高宮亀喜と思われるが、棚田によれば、明治34（1901）年に御影師範学校に赴任し、剣道・陸上競技・水泳など指導のベテランとあり、大正11（1922）年9月に同高等女学校に転任し、10年6ヶ月にわたり女子体育の振興に尽くしたとされている⁹⁰⁾⁹¹⁾。

引用文献

- 1) 赤坂美月（2008）旧制女学校における課外のスポーツ活動の進展過程に関する研究－新聞社主催の大会（1919年）がもたらしたもの－。神戸学院経済学論集第39巻

- 第3・4号，神戸学院大学経済学会，pp. 39－71.
- 2) 赤坂美月（2013）兵庫県における女子陸上競技大会のはじまりと普及一特に新聞社のかかわり（1923-1926年）に着目して－. 神戸学院経済学論集第44巻第1・2・3・4号，神戸学院大学経済学会，pp. 1－20.
 - 3) 大阪朝日新聞神戸版. 1926年9月19日.
 - 4) 兵庫県教育史編集委員会（1963）兵庫県教育史. 兵庫県教育委員会，p. 454.
 - 5) 前掲書1). pp. 52－60.
 - 6) 前掲書1). pp. 60－63.
 - 7) 大阪毎日新聞兵庫県附録. 1920年11月22日.
 - 8) 大阪毎日新聞兵庫県附録. 1921年5月30日.
 - 9) 大阪毎日新聞兵庫県附録. 1921年11月24日.
 - 10) 大阪毎日新聞兵庫県附録. 1922年6月19日.
 - 11) 大阪毎日新聞兵庫県附録. 1922年11月19・20日.
 - 12) 大阪毎日新聞兵庫県附録. 1923年10月29日.
 - 13) 大阪毎日新聞兵庫県附録. 1924年6月8・9日，11月22日.
 - 14) 大阪毎日新聞兵庫毎日. 1925年6月8日.
 - 15) 大阪毎日新聞兵庫毎日. 1926年6月7日.
 - 16) 大阪毎日新聞兵庫毎日. 1926年11月22日.
 - 17) 大阪毎日新聞兵庫県附録. 1923年4月23・24日.
 - 18) 前掲書2). pp. 1－20.
 - 19) 大阪朝日新聞神戸版. 1925年11月9日.
 - 20) 大阪朝日新聞神戸版. 1926年11月22日.
 - 21) 大阪朝日新聞神戸版. 1926年6月28日.
 - 22) 公益財団法人日本テニス協会ホームページ「歴史：日本テニスの年表」. 2016年12月13日確認.
 - 23) 日本体育協会監修（1982）スポーツ大百科. スポーツ大百科刊行会，pp. 517－518.
 - 24) 石月静恵（1996）戦間期の女性運動. 東方出版(株)，pp. 1－150.
 - 25) 大阪朝日新聞. 1919年11月25日.
 - 26) 大阪朝日新聞. 1919年11月23日.
 - 27) （1924）婦人第一巻第一号. 全関西婦人連合会，p. 5.
 - 28) 文部科学省「スポーツ基本法」.
 - 29) 前掲書25).
 - 30) 前掲書24). pp. 59－60.
 - 31) 前掲書24). pp. 44－55.
 - 32) 大阪朝日新聞夕刊. 1922年10月22日.
 - 33) 大阪朝日新聞. 1924年11月2日.
 - 34) 大阪朝日新聞神戸附録. 1920年6月28日.

兵庫県における女性スポーツの組織化の考察

- 35) 大阪朝日新聞神戸附録. 1921年6月6日.
- 36) 大阪朝日新聞神戸附録. 1922年6月5日.
- 37) 大阪朝日新聞神戸附録. 1923年6月4日.
- 38) 大阪朝日新聞神戸附録. 1924年6月9日.
- 39) 大阪朝日新聞神戸版. 1925年6月8日.
- 40) 大阪朝日新聞神戸版. 1926年5月17日.
- 41) 前掲書24). pp. 61-65.
- 42) 大阪朝日新聞神戸附録. 1920年6月19日.
- 43) 前掲書35).
- 44) 前掲書37).
- 45) 前掲書34).
- 46) 大阪朝日新聞神戸附録. 1920年6月29日.
- 47) 大阪朝日新聞神戸附録. 1924年5月28日.
- 48) 前掲書27). p. 5.
- 49) (1925) 婦人第二卷第一号. 全関西婦人連合会, p. 31.
- 50) 大阪朝日新聞神戸版. 1926年5月15日.
- 51) 大阪朝日新聞神戸版. 1926年5月14日.
- 52) 前掲書24). p. 60.
- 53) 前掲書27). p. 10, p. 16.
- 54) 前掲書49). pp. 56-64.
- 55) (1925) 婦人第二卷第二号. 全関西婦人連合会, p. 49.
- 56) (1925) 婦人第二卷第三号. 全関西婦人連合会, p. 59.
- 57) (1925) 婦人第二卷第五号. 全関西婦人連合会, p. 57.
- 58) (1925) 婦人第二卷第六号. 全関西婦人連合会, pp. 36-46.
- 59) (1925) 婦人第二卷第七号. 全関西婦人連合会, p. 6.
- 60) (1925) 婦人第二卷第八号. 全関西婦人連合会, pp. 2-7.
- 61) (1925) 婦人第二卷第十一号. 全関西婦人連合会, pp. 24-26.
- 62) (1926) 婦人第三卷第一号, 全関西婦人連合会, pp. 27-29.
- 63) (1926) 婦人第三卷第二号, 全関西婦人連合会, pp. 28-31.
- 64) (1926) 婦人第三卷第七号, 全関西婦人連合会, pp. 12-64.
- 65) (1926) 婦人第三卷第八号, 全関西婦人連合会, pp. 10-52.
- 66) (1926) 婦人第三卷第九号, 全関西婦人連合会, pp. 8-56.
- 67) 大阪朝日新聞神戸版. 1926年5月3日.
- 68) 前掲書40).
- 69) (1926) 婦人第三卷第六号, 全関西婦人連合会, pp. 62-64.
- 70) 神戸又新日報. 1926年8月2日.
- 71) 前掲書3).
- 72) 前掲書4). pp. 455-456.

- 73) 大阪朝日新聞神戸附録. 1923年6月23日.
- 74) 前掲書3).
- 75) 棚田真輔（1975）スポーツ人風土記 兵庫県上巻. 道和書院, pp.283-284. p. 308.
- 76) 大阪朝日新聞神戸版. 1927年5月28日.
- 77) 大阪毎日新聞兵庫毎日. 1927年6月6日.
- 78) 大阪朝日新聞神戸版. 1927年5月28日, 6月20日.
- 79) 神戸又新日報. 1927年6月20日.
- 80) 大阪朝日新聞神戸版. 1927年9月26日.
- 81) 神戸又新日報. 1927年9月26日.
- 82) 大阪朝日新聞神戸版. 1927年10月4日.
- 83) 京都府バスケットボール協会ホームページ. 2017年1月8日確認.
- 84) 棚田真輔（1975）スポーツ人風土記 兵庫県下巻. 道和書院, p.21.
- 85) 神戸山手クラブホームページ. 2017年1月20日確認.
- 86) 前掲書24). pp.47-48.
- 87) 前掲書24). p.46.
- 88) 前掲書27).
- 89) (1927) 婦人第四卷第一号, 全関西婦人連合会, p.52.
- 90) (1932) 創立三十周年記念誌. 兵庫県立第一神戸高等女学校・校友会・欽松会, p.69.
- 91) 前掲書75). p.293.